

# 自己の多面性がアイデンティティを介して 抑うつに与える影響の検討

○木谷智子<sup>1</sup>・岡本祐子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>エリザベト音楽大学・<sup>2</sup>広島大学大学院教育学研究科)

## 目的

近年、多面的な自己を呈する青年が多く指摘されており(成田, 2001; 高石, 2009), 自己の多面性に注目が集まっている。自己の多面性は社会的なストレスを緩和することが示されている(Linville, 1987; Smith & Cohen, 1993)。しかしその一方で、抑うつや不安を引き起こすとされている(Block, 1961; Donahue, Robins, Roberts, & John, 1993)。自己の多面性が抑うつ等の精神的健康の低さと関連する理由としては、自己の多面性がアイデンティティの混乱を引き起こすためだと考察されている(Block, 1961)。

しかし、先行研究においては、自己の多面性と精神的健康のみの関連しか検討がなされておらず、自己の多面性と精神的健康の関連をアイデンティティが媒介するかどうかについては明らかになっていない。よって本研究では、自己の多面性がアイデンティティを混乱させ、抑うつに結びつくという仮説を立て、検証を行うこととする。アイデンティティは、「斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つの次元から構成されるため(谷, 2001), 自己の多面性がアイデンティティの各次元に与える影響を検討することとする。

## 方法

**参加者** 国立総合大学の大学生 167名, 平均年齢 19.37歳。**質問紙構成** (a)特性語分類課題: 自己の多面性を測定するための課題であり, Linville(1987)の方法を参考に作成した。この課題は, 参加者に自分が関わっている社会的活動や社会的役割を記入させ, それぞれの活動や役割における性格特性を尋ねるものである。活動や役割の数が多く, それぞれの活動や役割において自己の性格特性が異なっているほど多面性の得点は高くなる。(b)多次元自我同一性尺度(MEIS; 谷, 2001)(4因子, 20項目), (c)改訂版大学生用ストレス自己評価尺度の抑うつ情動的尺度(尾関, 1993)(1因子5項目), (d)フェイス項目。学年, 年齢, 性別を尋ねた。

## 結果

自己の多面性得点が, MEISの各下位因子を媒介して, 抑うつに寄与するという仮説モデルを立て, 構造方程式モデリング(SEM)を行った。より当てはまりのよいモデルを作成するために, 作成したモデルから, 有意でないパスを取り除き, より適合度の高いモデルを採用した (Figure1)。

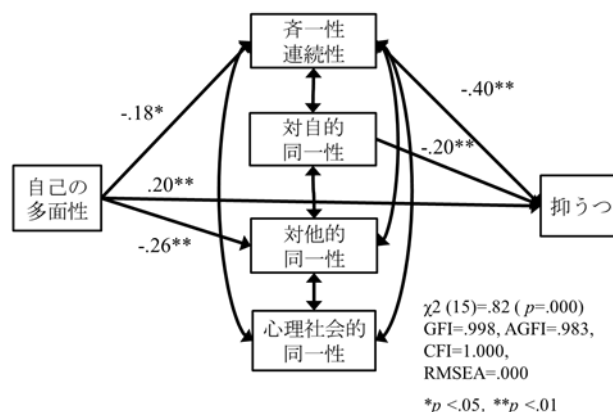


Figure 1 自己の多面性からアイデンティティを介した抑うつへの影響

## 考察

谷(2008)は, MEISの下位因子は, 幼少期から形成される「中核的同一性」と, 青年期において, 社会の中で形成される「心理社会的自己同一性」の2つの側面に分けられることを示している。「中核的同一性」には MEISの下位因子における斉一性・連続性と対他的同一性が含まれ, 「心理社会的自己同一性」には, 対自的同一性と心理社会的同一性が含まれる。

自己の多面性から, 斉一性・連続性と対他的同一性に負のパスが見られたことから, 自己の多面性は, 中核的同一性を混乱させ, 抑うつに結び付くと考えられる。また, 自己の多面性の影響を直接的な影響を受けていない対自的同一性も抑うつに負の影響をもたらしていた。アイデンティティの4つの次元は互いに強く関連しあっているため, 自己の多面性は, 中核的同一性を介して間接的に対他的同一性を混乱させるのではないかと推測される。